

研究課題 (テーマ)		近現代日本の中等教育における女子生徒の職業アスピレーション形成と学校文化に関する計量歴史社会学的研究	
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	教養教育	講師	濱 貴子
研究結果の概要			
<p>本研究「近現代日本の中等教育における女子生徒の職業アスピレーション形成と学校文化に関する計量歴史社会学的研究」では、文部省統計資料調査より近現代日本の中等教育における女子生徒の卒業後の進路動向をデータベース化し、その成果として戦前期の進路動向変化について明らかにすることができた。</p> <p>まず、戦前期高等女学校本科・実科高等女学校（以下、両者をまとめて「高等女学校」とする）における全国的な卒業後の進路動向については、戦前期を通じて、割合の高い順に家居、進学、就職であり、高等女学校を卒業したら家に入るということが一般的であった。特に高等女学校への進学率がエリート段階からマス段階に近づいていく1920年から1930年にかけては家居率が高まり、進学率は微増、就職率は低下した。（1920年：進学率20.7%、就職率11.4%、家居率67.9%。1930年：進学率21.6%、就職率5.2%、家居率73.2%）しかし、その後、高等女学校進学率がさらに高まっていく1930年から1938年にかけては家居率の低下と同時に進学率・就職率の高まりがみられ、特に就職率は10%程度高まり、徐々に卒業後の進学・就職の道も拡大していった（1940年：進学率26.6%、就職率14.6%、家居率58.8%）。また、就職率については、地域差が大きく教員比率の高い地域も少なくなかった1920年から、1930年にはほとんどの地域で一様に就職率は下がったが、1938年には産業化の進んだ地域を中心に全般的に就職率は高まっていった。</p>			
<p>【1920年】                      【1930年】                      【1938年】</p> <p>都道府県別戦前期高等女学校就職率の推移（1920年、1930年、1938年）（%）</p>			
今後の展開			
<p>今後は、まずは前年度から引き続き戦後から1980年までの高等女学校を前身とする高等学校の進路動向に関するデータベースを完成させるとともに、各時期の全国・都道府県別・各校別の就職率の推移ならびに都道府県別・各校別の就職率の規程要因とその変化を多変量解析により明らかにする。特に都道府県別に分析を行う際には、文部省統計資料のデータだけでなく、各時期の各都道府県の産業構造や経済規模にも注目し、詳しい分析を進めていくことを予定している。</p>			

【留意事項】

- 1 内容は研究途上にあるものや特許に関わるものなどを除き、「公表してよい部分」のみ記載してください。
- 2 できるだけ、専門外の一般者でも理解できるよう、わかりやすく平易な文章で記載してください。
- 3 できるだけA4（ワード様式）1枚で収まるように記載してください。
- 4 様式は、電子データで提出してください。